HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Studies on Being in Aristotle's Metaphysics Beta [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	Karuzis, Joseph
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第11057号
Issue Date	2013-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/53781
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Joseph_Karuzis_review.pdf (「審査の要旨」)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　博士（文学）　氏名　Joseph Karuzis

主査　教授　千葉惠
審査担当者　副査　教授　中戸川孝治
副査　准教授　近藤智彦

学位論文題名
Studies on Being in Aristotle’s *Metaphysics* Beta
（アリストテレス『形而上学』B 巻における存在の研究）

氏はアリストテレスにおける存在を存在として考察する第一哲学の可能性をめぐり、この西洋形而上学の中心問題を正面から引き受け、形而上学の統一的解釈を試みている。氏は第二章においてアリストテレスにおける第一哲学の二段階説を提唱し、第一段階として「いかに存在は語られるべきか？」という視点からの「ロギコス（形式言論術）」という方法により遂行される普遍存在論を提示する。この存在を存在として考察する普遍存在論の枠組みのなかで、アリストテレスは実体と属性の存在論的身分差を確立し、実体のもとにあらゆる存在者を帰一的に秩序づけていると氏は論じる。そのうえで、アリストテレスが第二段階として、実体の第一のものとしての「不動の動者」とも「ヌース」とも呼ぶ神を神学において考察していると氏は論じる。従来の「存在論―神学アポリア」に対する対処法と重なるところはあるが、アポリア巻の考察を経たうえでの「一つの学」の可能性の提案として説得性力がある。この点は高く評価される。

第三章の矛盾律の考察は普遍存在論の基礎となるロギコスな考察として重要な位置を占め、その分析は詳細なものとなっている。この部分はハーバード大学の若手研究者の会で発表され、評価され電子版において公刊されている。氏は無矛盾の原理（矛盾律）(Principle of Non Contradiction (PNC))を最も根源的な存在と論理の原理であるとしてその探究に取り組む。氏は最初にアリストテレスの四つの PNC の表記を提示し、それぞれから PNC の理解を試みそしてそれらを秩序づける。続いて、PNC 否定論者を(A)(B)二つのグループに分け反論する。(A)にはプロタゴラス、アナクサゴラス等が属し、彼らは事態の困難さ故に自ら知らずに意図せずに矛盾律を否定するため、説得が必要とされる。(B)は真理というよりは議論それ自身のため矛盾律の論証を求めるために、議論により強制されることにより論駁される。

PNC は最も基礎的でありそれ自身を他のより先行する原理により論証するこ

とはできず、ただ「論駁的な証明」だけが提示される。「矛盾律は存在しない」という言明は「矛盾律は存在しかつ同時に存在しないことはない」という実際にはPNCに基づいた言明となる。「人間尺度説」を唱えるプロタゴラス等相対論者はグループ(A)に属するPNC否定論者であり、彼らの矛盾がPNCにより説得される。氏はこのようにアリストテレスのPNCがあらゆるロギコスな議論の基礎となっていることを明らかにし、その限りにおいて先行哲学者を批判的に乗り越えていることを論証している。

さらに、第六章において非感覚的な存在者の探求をプラトンのイデア論批判における二十のアポリアの分析を通じて本格的に遂行している。その代替案としてアリストテレスの質料形相論が不可欠であることを説得的に論証している。そのうえで不動の動者としての神が純粋な形相として普遍存在論の帰一構造の枠のなかで論証されている。

このように、氏の形而上学的考察は粘り強いものであり、壮大でさえあると言うことができる。ただ、難点があるとすれば、『形而上学』B巻（アポリア巻）におけるアポリアそれ自身の分析が弱く、その応答は拙速になりがちであることは指摘されねばならない。また、アリストテレス研究の連綿とした二次文献の蓄積に対する考慮に欠けているところがあること、さらに従来の翻訳にたよるところが多く見られ、その翻訳の問題点に引きずられる傾向にあったことも指摘されねばならない。これらの難点を抱えるが、氏のたゆまぬ形而上学的精神性故にこの論文を一貫したものとして提示しえたことはこれらの難点を凌駕するものであると語りうる。

本申請論文全体は一つの統一性を持つものとして展開され、第一哲学は神学にきわまるという明快な主張を提示するにいたっている。審査委員会では全員一致で博士（文学）を授与できるという見解に達した。